



2006年

SORA 15号

晴
夜
(15)
—
3

柴
田
佐
知
子

島
の
端
に
島
人
集
ふ
宵
祭

祠
ま
で
つ
い
て
き
た
り
し
蝮
草

涼しさや魚ももいろの祝ひ膳

苦しくて飛び上がりくる浮人形

団扇手にとれば何となく煽ぐ

黙りこむ男のやうな蝸牛

瀧暮れて黄泉へまつすぐ水落す

八月や塩も砂糖もただ白し

大河

高倉恵美子

種洗ふ村の小川を堰き止めて

川底に鯰をさまる神の前

一族の揃ひし田植ありし頃

花菖蒲美人といふは首細し

初茄子を鳥にとられてしまひけり

泳ぐ子もなくて用水豊かなる

麦藁の礼にと西瓜貰ひけり

夏盛ん大河のごとき雲ありて

甚平を拒みて夫の傘寿過ぐ

娘に送る小さき南瓜選びをり

山風を入れて食卓涼しかり

来年の種の予約や花茗荷

朝顔や亡ぎ子の年を数へをり

野薊や試歩の男の足太し



夏
草

樋口みのぶ

剪定の束ね置かれし墓地の隅

振り向けば花にこもれる父郷かな

花の雨会はずじまひの紅を拭く

夏草や籠に耕の紐つけて

怒るとき頸の伸ぶなり羽抜鶏

水打つや鬼門の方を念入りに

櫛に水とろりとかへる夏ゆふべ

墓守に聞く郷土史や蚊を叩き

一近づけば蟻の行き交ふ博多堀

外に出れば山笠やまかさの町なり東長寺

学童のみな上を向く山笠の前

金魚鉢ゆらりと猫の通りけり

たましひの数だけ墓地の赤とんぼ

露草の描き終ゆるまでもたざりし

サッカーの子等につきくる砂煙



峰
雲

青山
悠

東長寺

壊えすすむ青水無月の博多堀

夾竹桃赤し殉死の墓の数

胎内めぐり闇に汗の手握りあひ

承天寺

山笠の起源の寺や朝曇

墓守りの屈背も梅雨の重さかな

夏祭過ぎて素顔の街となる

飛んですぐさざ波に乗る水馬

水打つてうつつて面影遠くなる

八方に青嶺めぐらす祝膳

峰雲や疲れの見ゆる観覧車

退屈なひと日の暮るる青簾

遠雷や別れのことばそこそこに

梅雨幽き一天占むるタワーの灯

夏霧や立枯れ多き和白瀉

水上スキー真青な湾を切る



縦横斜め

秋
千
晴

浅蜷置く辺りに汐の乾きをり
検査病棟廊下ながなが夾竹桃
棒立ちの枯向日葵に日が廻る
園児らの縦横斜め昼寝のとき
体よりかくも大きを蟻が引く
青き目の巫女に形代納めけり

老犬の舌がだらりと大暑来る

夕立過ぐ窓に花びら貼り付けて

母の家母の手料理涼しかり

容赦なく犬歯削がる酷暑かな

地獄絵を見ずに出でたる夏の寺

スカートひだも流せり秋出水

初柿の木り口尖る夫尖る

束の間に小筆乾けり稲光

秋時雨万華鏡見てまた見入る



帰
省

あさなが捷

早く来てひとり占めたる夏座敷

子離れは早目にすませえこの花

どこから入りても涼しき六角堂

紫陽花の濃きも淡きも仏の掌

夕立のはじめの匂ひ人を待つ

雨催ひダリアまあるく咲いてをり

縞くつきりと揚がりたる初鯉

長き脚もて余しをり帰省の子

朝顔を棚に並べて参観日

集落を浮かせ台風過ぎにけり

猪垣の閉ぢ込めてゐる山の音

秋刀魚返して七輪の燃え上がる

村相撲高く積まれし新酒かな

いかづちやかよわきふりは通じざる

山姥の頭の揺るる芒原

